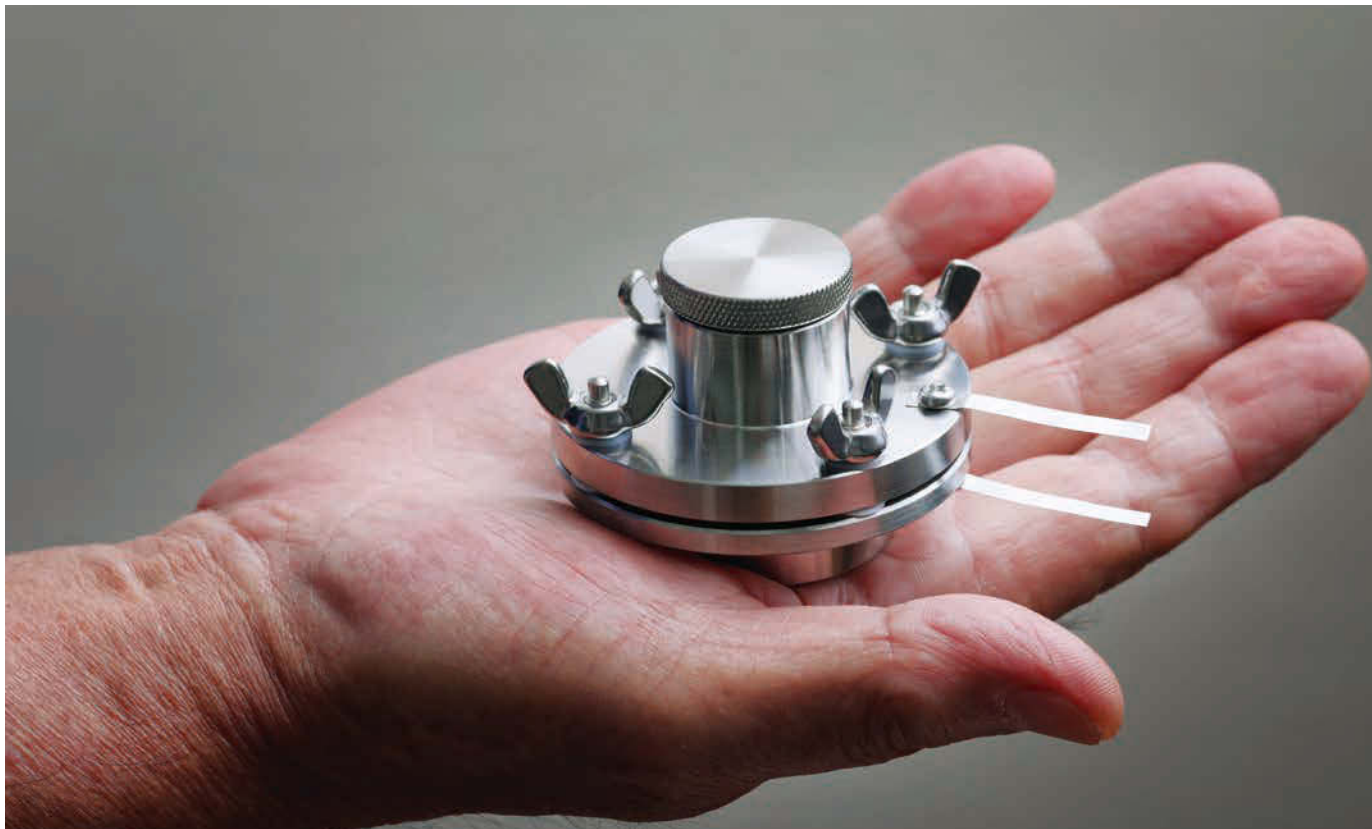


キラリ TOKYO

—輝く企業の現場から—

第165回 株式会社 京浜理化工業



リチウムイオン電池に使われる電極などを評価する際に欠かせない「試験用二極セル」。世界中の研究機関で使われており、京浜理化工業を代表する製品だ

あのリチウムイオン電池の開発に携わった町工場

京浜理化工業が設立されたのは、第1次オイルショックから間もない1977年のことだ。当初は売り上げが伸ばせずに苦しんだが、創業3年目、MRI(磁気共鳴画像法)診断装置の開発に携わったことが大きな転機となった。

「当社が創業当初から培ってきた圧力容器に関する技術が評価され、MRIの開発プロジェクトに参加。完成した装置は1985年に開かれた国際科学技術博覧会(つくば万博)に出展され、国から表彰を受けました。これがきっかけで、さまざまな企業や研究機関から研究用実験機器の開発を依頼されるようになったのです」(代表取締役会長 佐瀬都司氏)

2019年、旭化成名誉フェローの吉野彰氏がリチウムイオン電池の発明でノーベル化学賞を受賞したが、こちらでも京浜理化工業は大きな役割を果たしていた。

「吉野さんとは、リチウムイオン電池の開発が始まった約30年前からともに歩んできた『戦友』です。知恵を出し合い、ときには激論を交わしながら実験機器をつくり続けてきた成果が吉野さんのノーベル賞という形で報われたのは、本当にうれしかったですね。授賞式に参列した吉野さんに招待され、家族

と一緒にストックホルムを訪れたのもいい思い出です」(佐瀬氏)

技術への誠実さと強い信念だけは決して曲げない

社員数9人の町工場がなぜ、名だたる大企業や世界的な研究機関から頼りにされているのか。その秘密は、常に技術力を高めようとする企業風土にあるのかもしれない。

「たとえば、社員が試作のために予算を求めてきたとします。経営者としては余計な出費を抑えたいものですが、技術力の向上につながるなら『存分にやってみよ』と後押しするのが私のポリシー。その代わりに、お金をかけたからには、できるだけ多くのことがらを学び尽くせとハツパをかけます。

当社は少数精鋭で、全員が何らかの得意分野を持っています。そして顧客から難しい注文が寄せられると、さまざまな角度から知恵を出し合い、要望された以上の、機器を生み出すのです。我々の最大の強みは、社員たちの知恵と技術力。これを伸ばすためなら、努力は惜しみません」(佐瀬氏)

技術に対してとことん誠実な姿勢も、京浜理化工業が信頼を築いてきた原動力かもしれない。

「技術的に正しいという信念があれば、相手が大企業や大学

技術の道を究め続ける

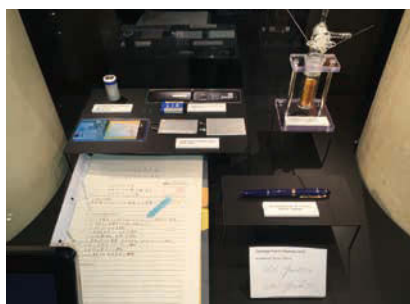
[会社概要]

代表：代表取締役会長 佐瀬都司くにし氏
業種：研究用実験機器など、幅広い機器の
開発・製造・販売・保守
資本金：1000万円
従業員：9名（2020年6月現在）
所在地：東京都大田区本羽田1-26-16
TEL：03-3745-0133
FAX：03-3745-5854
<http://www.keihinrika.co.jp/>



常に学ぶ姿勢を持つ

「社員には常々、本業以外の研究テーマを持つように伝えていきます。私自身も2015年、福島原発の処理水からナノファイバーを使ってセシウムを除去する仕組みを考えました。そうして自らの幅を広げることが技術者としての成長につながるのです」（佐瀬氏）



スウェーデンのストックホルムにあるノーベル博物館には、リチウムイオン電池開発初期からの模型などが展示されている(写真：佐瀬都司氏)



吉野彰氏と佐瀬氏はともに研究を進めてきただけでなく、しばしばカラオケに行くなどプライベートでも親交が深い



大手メーカーでキャリアを積んでから京浜理化学工業に転じ、現在は代表取締役社長を務める息子の大輔氏は、会社の柱として活躍中

教授でも自らの主張を曲げないのが当社の哲学です。そうした姿勢を評価していただき、『京浜理化学工業さんにごそ頼みたい』と言ってくださるところもありますよ」（佐瀬氏）

特許や意匠登録といった知的財産を守るために公社 東京都知的財産総合センター（以下「知財センター」）をフル活用している点も、京浜理化学工業の特色のひとつだ。

「当社には、すでに特許を取得していた技術を大手企業に模倣され、訴訟で多くの費用と時間を浪費した苦い経験があります。そのとき知財センターに相談して以来、さまざまな支援をいただけてきました。担当アドバイザーの方から『大手企業と共同で特許を取得する』『特許出願の前には特許調査を行う』などの実践的なノウハウを授けていただいたことで、特許に関するトラブルはほとんどなくなりました」（佐瀬氏）

終わりなき技術探求を知的財産として守る

全社員が主体性を持ち、それぞれの技術を深め続けること。そして、より安全で世の中の役に立つ製品をこれからも送り出すこと。それが京浜理化学工業の目指す姿だ。

「当社が開発に携わったリチウムイオン電池がスマートフォンから宇宙ロケット、深海探査船までの幅広い場所で使

われていることは、当社にとって大きな誇りです。しかし、技術というものに『終わり』などありません。たとえば現在のリチウムイオン電池には電解液が使われているため、液漏れや発火などの危険性が、小さいながらもあります。そこで、さまざまな実験を繰り返したり、固体電解質を使ったりすることで、少しでも安全なリチウムイオン電池の開発を実現したいですね。

我々は技術と知恵で成り立っている会社。これからもその道を究め、『京浜理化学工業に頼めばなんとかしてくれる』と頼りにされる存在であり続けることが、私の願いです」（佐瀬氏）

取材後記

物事をよく観察すること。時には相手と喧嘩になっても議論すること。それ以外他社と変わらないよ、と佐瀬会長は事もなげに話します。しかし実際に行うのは簡単ではありません。多くの試行錯誤を重ね培われた観察眼、相手が誰であっても臆せず意見を交わしオーダーに対応する開発力、そして真摯に技術に向き合う姿勢で信頼を得てきた当社。世界に認められる日本の研究を支え続けます。（企画課 松岡香織）